【研究ノート】

西南戦争時の政府暗号補論

大野哲弥

OHNO, Tetsuya

キーワード： 太政官暗号； 司法省暗号； 元老院暗号； 陸奥宗光

Received: 2012. 10. 31

1. はじめに

明治初期の暗号については、長田順行と佐々木隆の研究がある¹⁾。長田は太政官暗号について、防衛研究所所蔵の『明治十年 密事日記』などを利用して復元している。また田中信義は、国立公文書館所蔵の『電報来信原書』を利用して補足している²⁾。最近では、猪飼隆明が当時の内務省暗号を紹介している³⁾。

本論では、国立公文書館所蔵の『電報録其四』などに残されている暗号電報や太政官暗号表を利用して、当時の暗号利用状況を検討する。また司法省、元老院の暗号を復元し、当時の政府暗号の特徴や整備状況を考察する。

2. 西南戦争時の太政官暗号

鹿児島で政治結社私学校党が弾薬庫を襲撃した1878(明治10)8月末から2月中旬にかけ、天皇は関西に行幸中であり、三条実美太政大臣をはじめ、伊藤博文参議、山縣有朋参議、川村純義海軍大輔(残されている電文では「河村」と表記されている)らが同行していた。西南戦争勃発により還幸は延期され、天皇は7月末まで京都に滞在した。

1月29日夜から30日にかけて、私学校党が、陸軍火薬庫を襲い、小銃、弾薬を略奪した。さらに31日夜には海軍造船所の火薬庫を襲い、ここでも小銃、弾薬を奪った。

明治天皇は、1月24日に高雄丸で横浜を出発、28日に神戸に到着、同日京都入りした。鹿児島の海軍造船所襲撃に関し、2月4日に東京の中牟田倉之助海軍少将経由で天皇に同行していた川村海軍大輔に電報で通知された⁴⁾。川村は林友幸内務少輔とともに2月7日に高雄丸で鹿児島に向け、神戸を出港し、9日に到着した。

太政官電報と見られる最初の電文は、東京の大久保利通が2月5日に川村海軍大輔と伊藤博文それぞれ打電した次の2通である⁵⁾。かっこ内および単独のカタカナ表記が実字である。原文は暗字に実字が交じっている。

ワ二(カ) ソ六(ゴ) ワ八(シ) ヨ四(マ)。 レ六(ダ) シ ヨ九(ヤ)
ワ四(ク)。 ヌ ワ九(ス) ヨ五(ミ) カ七(ト) タ五(ラ) タ八(レ)

ワ八 (シ) ワ六 (コ) カ七 (ト)。ソ ノ マ ル。ワ七 (サ) ワ八 (シ)
 ワー (ヲ) ワ三 (キ) ソ二 (ガ) カ三 (タ) ワ三 (キ) ニ カ五 (ツ)
 ワ三 (キ)。 ニ ヲ七 (イ) タ八 (レ) ニ テ モ。ワ八 (シ) カ五 (ツ)
 カ四 (チ) ヨ九 (ヤ) ヲ八 (ウ)。カ四 (チ) ヨ九 (ヤ) ワ四 (ク)
 ワ八 (シ) タ二 (ユ) ワ九 (ス) タ七 (ル) ヨ九 (ヤ) ヲ八 (ウ)。
 ワー (ヲ) カ七 (ト) タ六 (リ) カ八 (ハ) ワ二 (カ) タ五 (ラ)
 レ二 (井)。 ヨ ロ シ ク ト ズ ン ズ。ゼ ン タ イ。ヨー (フ)
 カー (セ) ヲ七 (イ) ノ ワ八 (シ) タ四 (ヨ) ソ三 (ギ) ヨ九 (ヤ)
 ヲ八 (ウ) タ二 (ユ) ヲ九 (エ)。カー (セ) ヲ七 (イ) タ六 (リ) ワー (ヲ)。
 モ ツ テ。カ二 (ソ) ノ ワ三 (キ) タ四 (ヨ) ワ四 (ク) ワー (ヲ)。
 カー (セ) ヨ七 (メ)。ソ八 (ジ) タ二 (ユ) ン ソ八 (ジ) タ二 (ユ) ン
 カ七 (ト)。カ七 (ト) タ七 (リ) ワ八 (シ) ヨ七 (メ)。カ二 (ソ) ワー (ヲ)
 タ五 (ラ) ヨ二 (ヘ) ツ三 (バ)。タ ト ヘ ヨ九 (ヤ) ツ五 (ブ) タ七 (ル)
 タ七 (ル) カ七 (ト) ヨ八 (モ)。ヲ七 (イ) ワ二 (カ) ン ナ ワ八 (シ)
 レー (ワ) タ八 (レ) カ八 (ハ)。カ七 (ト) ヲ八 (ウ) ツー (ゼ) ン ノ
 レ七 (ヂ) ヨ九 (ヤ) ヲ八 (ウ) タ六 (リ) ワー (ヲ) モ ツ テ。ヨ二 (ヘ)
 ヲ七 (イ) レー (ワ) ニ。 カ ル リ ソ ウ ラ ヘ バ。ア ル イ ハ。
 ヲ八 (ウ) カ四 (チ) レー (ワ) ニ テ レー (ワ) タ七 (ル) タ七 (ル)
 ヨ八 (モ) カ八 (ハ) ワ二 (カ) タ七 (ル) ツ六 (ベ) ワ二 (カ) タ五 (ラ)
 ソ九 (ズ)。ナ ヲ。ヲ ダ ン ジ ノ ウ エ。ワ八 (シ) ワ三 (キ) タ二 (ユ)
 ヲ八 (ウ)。ワー (ヲ) ヨ二 (ヘ) ン ソ八 (ジ)。 カ二 (ソ) ノ カ九 (ヒ)
 カ七 (ト) レー (ワ)。ヲ ミ コ ミ シ ダ イ ニ テ。ミ ヤ ウ ニ チ。
 ユ ウ セ ン ヨ リ。ワ八 (シ) タ二 (ユ) カ五 (ツ) ツ八 (パ) カ五 (ツ)。
 ア リ タ シ。

2月5日1時55分発 東京 大久保利通

河村海軍大輔殿

ナ ヲ七 (イ) ワ二 (カ) ワ四 (ク)。ヲ六 (ア) ン ソ六 (ゴ) ヲ八 (ウ)
 ニ テ。ワ二 (カ) レー (ワ) ヨ六 (ム) タ五 (ラ) ヨ二 (ヘ) ヘ七 (電報)。
 レ六 (ダ) ワ九 (ス)。ワー (ヲ) レ六 (ダ) ン ソ八 (ジ)。ア リ タ シ

2月5日1時55分発 東京 大久保利通

伊藤参議殿

川村あての電報は、弾薬庫襲撃は捨て置くことはできないとし、不正を攻め、条理を説けば相手も内輪で割れるかもしれないと、と述べている。さらに大久保は、2月6日川村あてに同じ暗号を用いて、県官を強く攻め、西郷面会を第一とし、破断したら、速やかに引き上げ、長崎から報告するよう打電した。

川村は9日に鹿児島に到着したものの、上陸を拒まれ、船上で大山県令と面会するのが

やっとの状況であり、西郷隆盛とも会うことはできなかった。川村は同日鹿児島を発ち、風雨の影響から、当初予定していた長崎ではなく瀬戸内海に向かった。12日に尾道から、「ト テ モ、(カ四) チ シ (カ六) テ (ヲ七) イ、ナ リ (ワ二) カ (カ三) タ (ワ八) シ」と大阪の伊藤、山縣、東京の大久保らに打電する一方、帰路を急ぎ、同日夜神戸に到着、伊藤、山縣と落ち合った。この12日に川村が林と連名で伊藤、山縣あてに打った電文も同じ暗号が使用されているが⁶⁾、富岡敬明熊本県権令あての電報には内務省暗号が使われている⁷⁾。大久保が内閣暗号と呼んでいる暗号は、2月5日から2月14日まで、大久保—川村間に加え、大久保—伊藤間、三条—岩倉間、岩倉—伊藤間、さらに東西の太政官書記官間でも利用されている。

最後に同じ暗号を用いられている電報は、2月14日に岩倉右大臣が伊藤参議あてに打ったものである。2月15日11時40分発の岩倉から大久保に打った電報では、長田か明らかにした暗号表が使われている。この間、大久保は13日に玄武丸で横浜を出発16日に神戸に到着、同日京都入りした。

2月14日以前の電文から復元した暗号表は次のとおりである。表中の()は原語配列の規則性を利用した推定によるもの、空白は未利用のため不明のものである。

表1 太政官暗号1(内閣暗号)

子	ツ	ソ	レ	タ	ヨ	カ	ワ	ヲ	ル	ヌ	リ	チ	ト	ヘ	ホ	ニ	ハ	ロ	イ	九	八	七	六	五	四	三	二	一	
(フ)	ゼ	ド	ワ	イ	フ	セ	ヲ																						一
ペ	ゾ	ガ	井	ユ	ヘ	ソ	カ								人民							縣令							神戸
ポ	バ	ギ	ウ	エ	ホ	タ	キ															縣官							三
	(ビ)	グ	(エ)	ヨ	マ	チ	ク																海軍大輔						四
	ブ	ゲ	オ	ラ	ミ	ツ	ケ	可被下候				風説	昨日																五
	ベ	ゴ	ダ	リ	ム	テ	コ	ア	到着セリ				今日		高雄丸							御駐輦							六
	(ボ)	ザ	ヂ	ル	メ	ト	サイ						電報																七
	パ	ジ	ヅ	レ	モ	ハ	シ	ウ	承知セリ	至急御返事																			八
	(ビ)	ズ	デ	ロ	ヤ	ヒ	ス	エ							還幸														九

この暗号表を見るとナ行が抜けている。また電文の中にもナ行の字の暗字が見られず、そのまま平字が使われている。前述の大久保発川村あての電報では、「盗み」が「ヌ ワ九 (ス) ヨ五 (ミ)」、「仁礼」が「ニ ヲ七 (イ) タ八 (レ)」と不全な表記となっている。「ん」の暗字もなかったようである。

暗号表の欠落に作成者も気づき、在京の岩谷書記官から供奉していた中村書記官にナ行

欠落のためと改正号を2月10日に発出している⁸⁾。

御召船であった高雄丸、還幸など単語の部分に行幸関連とみられるがあることや、人民、風説など、当時の各地の不穏な情勢を反映している言葉が含まれている。

2月15日以降に使われた暗号表は、長田、田中によりほぼ解明されていたが、『電報集其四』に次の暗号表が残されている⁹⁾。

表2 太政官暗号2

ノ	ウ	ム	ラ	ナ	ネ	ソ	レ	タ	ヨ	カ	ワ	ヲ	ル	ス	リ	チ	ト	ヘ	ホ	ハ	ロ	イ	九	八	七	六	五	四	三	二	一		
ベ	ゴ	ダ	リ	ム	子	ソ	カ	十	一	御懸念被★	等	差出	實際	實説	焼亡	弾薬	海路	今日	月	飛脚船	叡感	報知	御着輦	士官	縣官	知事	伊藤参議	愛媛	開拓使	日新艦	鹿兒島	東京	老
ボ	ザ	ヂ	ル	メ	ノ	タ	キ	百	二	至急御返事	変リナシ	承知	意外	恙無	手配り	要地	陸路	明日	日	高雄丸	勅諭	訛傳	發艦	兵隊	侍從	品川	木戸孝允	福岡	巨魁	春日艦	熊本	横濱	式
バ	ジ	ヅ	レ	モ	ハ	チ	ク	千	三	御司令	便宜	落手	差遣	病氣	説論	人数	山路	明後日	時	清輝艦	御達	内密	徒黨	大隊	侍醫	大臣	宮内	大津	脱走	小倉	大分	浦賀	三
ビ	ズ	デ	ロ	ヤ	ヒ	ツ	ケ	萬	四	御伺候	都合	尤モ	出發	彼	探索	人氣	宿駅	先日	昼	華族	御布告	巡查	着艦	小隊	書記官	参議	陸軍	聖上	潜伏	山口	久留米	下田	四
ブ	ゼ	ド	ワ	イ	フ	テ	コ	ア	五	差越	金子入用	甚タ	到着	我	捕縛	静穩	鐵道	近日	夜	士族	御賑恤	出兵	御道中	龍駕	警察官	卿	海軍	皇太后	日向	八代	柳川	神戸	五
ペ	ゾ	ガ	井	ユ	ヘ	ト	サ	イ	六	開取	幸便	直チニ	取調	奉命	數多	不穩	電報	今月	午前	注意	暴動	御先發	御船中	臨御	近衛兵	大輔	外務	皇后	大隅	佐賀	下ノ関	兵庫	六
ポ	バ	ギ	ウ	エ	ホ	ナ	シ	ウ	七	電信ノ★	此段	俄ニ	行違ヒ	評議	僅少	暴發	郵便	来月	午後	至急	電信	御暇途	御休	還幸	騎兵	少輔	大蔵	太政大臣	洛中	島津	高知	大坂府	七
ン	ビ	グ	エ	ヨ	マ	ニ	ス	エ	八	御座候間	相済申候	決シテ	差支	直訴	急飛	鎮定	新聞	順風	一昨日	郵船	警衛	天機	御泊	御發輦	儀仗	駅通局	司法	右大臣	洛外	西郷	東艦	京都府	八
	ブ	ゲ	オ	ラ	ミ	ヌ	セ	オ	九	可被下候	御取計	不得已	乍併	情實	風説	放火	銃器	逆風	昨日	人民	軍艦	天覽	御上陸	御駐輦	鎮臺	縣令	内務	大久保参議	和歌山県	林内務少輔	龍驤艦	長崎	九

★御懸合被下間敷候、★★電信ノ文字不分明今一度御申越

「ニ」行が使われていないが、台湾出兵時に蕃地事務局が用いた暗号表でも、カタカナの「ニ」と漢数字の「二」と紛らわしいことから、「ニ」行は用いられていなかった¹⁰⁾。太政官暗号も同様の理由から「ニ」行が使われていなかったのもであろう。

人名の使い方は、2月23日に打たれた三条太政大臣發岩倉右大臣あての電報には、「三八(西郷)六四(陸軍)チュウジョウ」とある。三八は当初作成者の意図は定かではないが、「西郷隆盛」ではなく「西郷」という名字で使われていたようである。

九五「龍駕」からイー「御着連」まで、およびイ五「御道中」からイ九「御上陸」までは行啓関係である。さらにロ六「御先發」からハ五「御賑恤」まで行啓関係の言葉が含まれている。当時の状況も反映し、軍事用語に加え、放火、焼亡など、熊本城攻防を予見していたかのような単語も含まれている。

改正そのものも急遽行われたので、混乱を招いた。2月17日午前9時30分発の太政官書記官が神戸滞在中の川村海軍大輔にあてた電報は、「サクヤ、ノテンポウハ、カイセイゴウ、ヲ、モチヒ、タリ、ワカラズ、バ、イトウサンギ、ニ、タヅヌベシ」という内容である。この昨夜の電報とは、岩倉が川村にあてた「視察を刺殺と誤ったのではないか」とした良く知られたものである。

長田、田中が解明した太政官暗号は、2月15日以降に用いられた「改正号」である。この日は、薩軍本隊が鹿児島を出発した当日、西南戦争勃発とされている日にあたる。いずれにしても、改正後の電報も行啓関係の用語が目立ち、鹿児島の動向を危惧したうえでの行幸時用のものという側面が強い。太政官暗号は、行幸時の連絡用に作成され、欠落があったので、直ちに改正し、西南戦争時に利用されたという位置づけである。

3. 司法省暗号と元老院暗号

長崎の杉本中検事が2月21日に打った大木参議兼司法卿あての次の2通が『電報集一』に残されている。

暗文

リソフクキロ。タダセア。アボダナリ。イフムン。ブンユイモ^レ。エワホチギロ。ヲヲ^レ。リソミインハラムラヤニンキイ。レキケ。ナセイユ。ウアカア子イユシヒツサ。リセリ。ムキラナダンワン。リソミンイ。イムリフ。ムヤンリンヤケタリ

原文

シヨクチトモ。タタカイ。イマダナシ。サクコン。ゲンキスデニセマレトモ。ホボシヨフサンノミコミアラントス。ヒトリ。ナカサキ。ハイヘイウスキヲヲソル。シカシ。コトミナダンセン。シヨフンス。スコシク。コアンシンアリタシ

(諸口トモ。戦ヒ。未ダナシ。昨今。軍機スデニ逼レトモ。略勝算ノ見込アラントス。獨リ長崎。配兵薄キヲ恐ル。シカシ事皆断然。処分ス。少シク御安心アリタシ)

暗文

ヲンリテムムアクリリ子ムミンフスアワンリリソ子ケリラユフホロキソケハラシク

原文

ホンシツココイチシシウコフクワイセンシシヨウリシミキクマモトヨリノホヲチ

(本日午後一時会戦シ勝利シ) 右熊本ヨリノ報知)

次の表3は、2通の電報により復元した暗号表である。()は規則性から推測したものである。「アイウエヲ」と並んでおり、また暗字の「ヒ」と「シ」がいずれも実字の「ヲ」とされているなど、なお検討の余地があるが、イロハ順の実字に50音順に暗字をあてはめた単純な内容である。この暗号表は、長田が、長崎の杉本中検事が、2月19日に熊本の福岡県令に打った電文から復元した司法省暗号と異なっている。時期が重なり、司法省暗号

表も2種類あった可能性がある。またこの暗号表では、暗字の「イ」は実字「ロ」「ス」「サ」の3文字にあてはめられており、文脈上で判断しているものと思われる。

表3 司法省暗号

ト	へ	ホ	ニ	ハ	ロ	イ	実字
キ	カ	ヲ	エ	ウ	(イ)	ア	暗字
カ	ワ	ヲ	ル	ヌ	リ	チ	実字
セ	ス	シ	サ	(コ)	ケ	ク	暗字
ナ	子	ツ	ソ	レ	タ	ヨ	実字
ナ	(ト)	テ	ツ	チ	タ	ソ	暗字
ク	(オ)ヲ*	ノ	キ	ウ	ム	ラ	実字
フ	ヒ	ハ	(ノ)	子	(ヌ)	二	暗字
テ	エ	コ	フ	ケ	マ	ヤ	実字
モ	(メ)	ム	ミ	(マ)	ホ	(へ)	暗字
シ	ミ	メ	ユ	キ	サ	ア	実字
リ	ラ	(ヲ)	(エ)	ユ	イ	ヤ	暗字
	ン	ス	セ	モ	ヒ	エ	実字
	ン	イ	ワ	ロ	レ	(ル)	暗字

*暗号電報では、暗字「ヒ」をヲと訳している。

国立公文書館所蔵の元老院文書の『電報集』¹¹⁾に複数の暗号電報が残されているが、対応する原文は見当たらず、一部のものは原文と思われる部分が墨で消されている。秘密保持のために取られた措置と推測できる。

元老院の利用した暗号表については、政府転覆を計ったとして逮捕された大江卓の口供書に残されている¹²⁾。「自分、陸奥に通ぜし電信の文字は、元老院の暗号を用いたり、其暗号は「イ」の字を「ロ」と読み、「ロ」の字を「イ」と読むの都合にて、其余の文字も総て之に順じたる読方なりしと覚ゆるなり・・・」。

佐々木は明治期前中期の単一換字式の政府暗号は、キ、エ、オが一貫して除かれているのを明らかにしている。この条件で、単一換字式の暗号表を作成したのが次表である。「イ」と「ロ」、「ハ」と「ニ」など2字ずつ互いに暗字と実字の関係にある22組の対合の暗号である。

表4 元老院暗号

ナ	ツ	レ	ヨ	ワ	ル	リ	ト	ホ	ハ	イ
ラ	ネ	ソ	タ	カ	ヲ	ヌ	チ	へ	ニ	ロ
セ	ヒ	ミ	ユ	サ	テ	コ	ケ	ヤ	ノ	ム
ス	モ	シ	メ	キ	ア	エ	フ	マ	ク	ウ

『電報集』に収録されている陸奥宗光が2月22日午後1時に柳原前光議官らに打電した次の暗号文をこの暗号表で解読すると次の内容となる。

ノヤヒチク。ミタニロ。ロワウ。シマキウ。ロ子。エへ子レノハラレワ。

クマモトノ。シヨハイ。イカム。ミヤサム。イツ。ゴホツソクニナソカ
 (熊本の勝敗如何。宮さん、いつ御発足になそか)

3月1日午後3時10分に陸奥が中嶋議官あてに次の電文を打った。

ノイヨ`ク。ワエ`ミヤコ。メサヨヲニ。ラウクヨユワ。ノカミノ。ア`ウミウチ。MEM
 モ`ウチア`。ヒムミエス。
 クロダノ。カゴシマエ。ユキタルハ。ナムノタメカ。クワシク。デムシムト。ユウビムデ。
 モウシコセ。(黒田の鹿児島え行きたるは何のためか。詳しく。電信と郵便で申し越せ)

大江卓は、暗号表の構成を正しく供述したようである。44字を二つずつ順番に組み合わせ対号としたもので、暗号表を持ち歩く必要がないくらい単純である。暗号表で略されている「ン」については、「ム」を代用している。

4. 警視局暗号と林友幸の暗号

『電報集其四』には、警視局暗号と林少輔鹿児島縣滞在中往復電信暗号が記されている。警視局暗号は次の表である。

表5 警視局暗号

ト	ヘ	ホ	ニ	ハ	ロ	イ
ヤ	テ	エ	コ	フ	ケ	マ
ナ	子	ツ	ソ	レ	タ	ヨ
チ	カ	ワ	ヲ	ル	ヌ	リ
ク		ノ		ウ	ム	ラ
ミ		メ		ユ	キ	サ
ン	ス	セ			モ	ヒ
	三字ハ其儘				ア	シ

この暗号表は2月19日付の川路大警視発富岡権令あての電文を使って長田が解明した警視局暗号¹³⁾と異なっている。対合の特徴は同じであるが、長田が解明した暗号表では、キ、エ、オが含まれており、「其儘」の字を使っているのが7文字となっている。『暗号集其四』は、1877年4月の電文が収録されており、暗号表が改訂されたか、複数あった可能性がある。

また、林少輔鹿児島縣滞在中往復電信暗号という次の表が残されている。50音にアカサタナ、イキシチニと横に読み、逆順にあてはめたものである。林友幸内務少輔が2月9日に川村海軍大輔とともに鹿児島入りした際は、川村と連名で、伊藤、山縣両参議には太政官電報で、熊本の富岡権令には内務省暗号で、2月12日に打電しているので、この暗号は、

前年の12月から1月にかけて林が鹿児島視察の際に携行したものと思われる。内務省暗号以外に独自の暗号表を利用している点、保秘性への配慮をうかがわせる。

表6 林少輔鹿児島縣滞在中往復電信暗号

ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
タ	レ	ヲ	コ	ソ	ト	ノ	ホ	モ	ロ
	リ	ユ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
	ム	ヨ	ル	エ	ケ	セ	テ	ネ	ヘ
	ル	ヨ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
	ミ	ユ	リ	ウ	ク	ス	ツ	ヌ	フ
		レ	ヘ	ネ	ネ	テ	セ	ケ	エ
		ラ	ワ	イ	キ	シ	チ	ニ	ヒ
ン		ロ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	ヲ
ン		ア	カ	サ	タ	ナ	ハ	マ	ヤ

5. おわりに

西南戦争勃発時、各省は独自の暗号表の利用を開始しつつあった。1875年12月の大蔵省・内務省暗号は、イロハ順を逆に対合したもの、司法省が利用した暗号は、イロハ順と50音順を単純に対合したものである。さらに元老院暗号は44字を2字ずつ対合にしたものであった。この時期、各省の暗号は第一世代のもっとも単純に規則的に配列したものであった。ちょうど西南戦争の直前の時期に各省で暗号が利用開始されていたのである。

註

- 1) 長田順行『西南の役と暗号』（朝日新聞社、1989年）、佐々木隆「明治前中期の政府暗号」『メディア史研究』第3号（1995年6月）114-130。
- 2) 田中信義『電報にみる佐賀の乱神風連の乱秋月の乱』（中央印刷紙工、1995年）64-80。
- 3) 猪飼隆明「西南戦争における長崎の位置と資料」大谷正編『西南戦争に関する記録の実態調査と分析・活用についての研究』（専修大学大谷研究室、2012年）17-18
- 4) JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C09081851400 諸方来翰 大阪之部 明治10年2月4日～10年2月24日（防衛省防衛研究所）。
- 5) JACAR: A07090025300 単行書・明治十年二月 電報集一・本局書記官（国立公文書館）。
- 6) JACAR: A07090043400 電報来信原書一（国立公文書館）。
- 7) 前掲『電報にみる佐賀の乱神風連の乱秋月の乱』64-65。
- 8) 国立公文書館所蔵 『諸帳簿・西京行宮往復書 乾・明治十年』。
- 9) JACAR: A07090026200 電報録其四（国立公文書館）。
- 10) 拙論「明治7年、台湾出兵時の暗号電報」『情報化社会・メディア研究』第6巻16。
- 11) JACAR: A07090134200 電報録 元老院（国立公文書館）。
- 12) 前掲『西南の役と暗号』171-174。
- 13) 同前書、129-136。